

『一口ばなし』紹介

菊池真一

見立番付等を集成した『浪花みやげ』なる冊子があり、その中に『一口ばなし』がある。この『一口ばなし』は、『嘶本大系 第十六卷』に翻刻されている。

『浪花みやげ』と同類のものに、『吾妻土産』『面白草紙』『たのしみ草紙』などがある。この『たのしみ草紙』の中に、『浪花みやげ』所載のものとは別の『一口ばなし』が収められているものがある。未だ紹介されていないようなので、ここに影印・翻刻を掲げる。

『たのしみ草紙』は、『国書総目録』によれば、国会図書館・慶応大学斯道文庫・早稲田大学に所蔵されている。この他、大阪府立中之島図書館にも五冊本を所蔵する。筆者は『たのしみ双紙』一冊を所有しているが、これは慶応大学蔵本・早稲田大学蔵本・中之島図書館蔵本の第五冊に相当するものである。順序・中身に若干の相違はあるが、ほぼ同じものである。『一口ばなし』も順序は違うが、同じもの十枚が載っている。(国会図書館蔵本は、卷二が他本の卷五に相当する。ただし、一口ばなしは七枚しかない。)

ここでは、筆者所蔵本に従い、『一口ばなし』の十枚に、第一から第十の番号をつけて影印・翻刻紹介する。翻刻の要領は『嘶本大系』に準ずるが、一つの話の中の換行は空白一文字で示すこととする。「」内は割書である。

筆者は、『たのしみ双紙』の他に、一枚刷の『一口ばなし』五枚四種を所有しているが、これは『たのしみ双紙』所載の『一口ばなし』と同じものである。『たのしみ双紙』はノドの部分が見づらくなっているので、一枚刷があるものについては一枚刷の影印を掲げることとする。

成立年代であるが、筆者所蔵『たのしみ草紙』所載の『浮世風流』貝づくし』

に「天保十一子の十二月改大新版」とあるので、天保十一年頃と推定される。



「しんぱん」一口はなし (第一)

重忠のぬしやうハ きぬでない ちぶ じゃ
 黒雲ハまけぬ はづじや 地に つかぬ
 八卦見がかつた 家くいちがあるか うちら ない
 けんくわして 中なをりの さけハ あたまわり
 た、ミヤさん よふうれます はん じゃう
 甚兵へさんとハ おまへの事か ぞで ない
 忠介さん 三ミせん ひいてか かじり ます
 これを早ふ染て おくれいつきませう こんや
 井戸の中 石がはまつた 井
 四十七人の内 でもおもしろい人ハ 大石
 三之助のつかまれたハ たれじや わし じゃ
 つ、ミでうしの くそが鎌ニ付て くさ かつた
 あなのあいた 紙おくれ やれ く
 ふぐじる 百せんも くふ てつ ほうじや
 手ニ油ぐすり ぬつて ひに よし
 よふねる 女じや おきよ
 北ほり江市場わた喜板 (この一行は筆者所蔵一枚刷にはナシ)



「しんぱん」一口はなし(第二)

佐の源左衛門が いとめたつるを 荒次郎が 鳥たく つた
夜番にて 百両のばした とん く〜と

さんまへニ食が いかぬとうむ時 ちからがない さん前 たべました
高師直が 塩治判官ニ あつかういふハ ふなか

すしやむすめニ かりの ちぎりとハ これ もり
戎やの内義ハ ふたふくじや 金がたまる ふくつん じや

楠のはかりこと くそをにやして よせてニかけたら 皆にげていんだ くそがあ
される

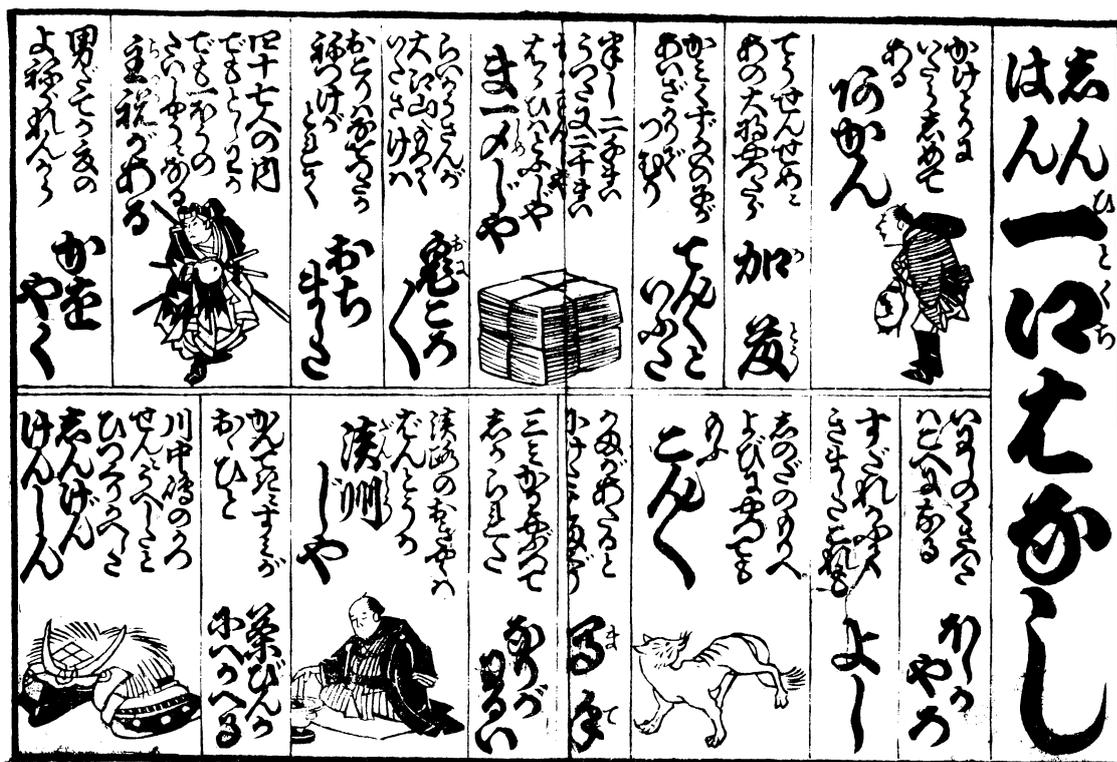
おなじ内じや とおもふたが ぶんけ
さかやき そつて きれで ふけ

そがの五郎が 大いその遊所へ かよふた しゃうく おもふて
大仏くようニ 重忠がかげ清を 見あらわし 悪七兵へまで 南都

しうとめさん 目がわるふて こよミハ よめ にくい
ふとん一まいでハ さむいかして おくれんか 夜着なき むしん

松八ばん はよふ とりニ こいといふたが 暮たら 宵
馬かたさん おまへの むすこか まご

つりがねに いぼがたんと ついてある それで たこがつく



「しんはん」一口はなし (第三)

かけとりに いたらしめて ある あかん
 てうせんせめニ あの大將やつたら 加藤
 かみくずかいの子が あいざかりで つむり てんくと いふた
 半し二千まい うつた又二千まい ちうもんじや はらひハとふじや ま一メじや
 らいかうさんが 大江山へもつて いたさけハ 鬼ころ
 おこりハなをつたか ねつけが とれて おち ました
 四十七人の内 でもとしわか でも一ほうの たいしやうニなる 主税がある
 男だてか夏の よねられんから かを やく
 いわしのくさつた ハこへになる ほしか やろ
 すだれかふて きましたこれも よし
 しのだのもりへ よびにやつても もふ こんく
 かまがあたると につかはまぐり 馬手
 ミミかわやぶつて しかられた なりが わるい
 淡路のおきやくハ ばんとうか 談州 じゃ
 かんてきニすミが お、ひと 茶びんか にへかへる
 川中嶋のかつ せんニうへしたと ひつくりかへした しんげん けんしん



「しんぱん」一口はなし (第四)

さどりのうたハ わしらがきい ても 道歌和哥 らん

かんぬしも まつりにハ 神ばい じゃ

おばアさんひとり まいりなされ おそなり升 孫ついで ある

はりがねの しよくにん 朝から早う おきる かねのばす

ふじのはなミニ かぜひいた はな たれ

べく内早う やすめ ねへ

寺をか平右衛門 げいしうへ ひきやくにいた あしがる

大工さん仕事バへ すしがやつてある こけら じゃ

下たやあつらへ ておいた ひき ずりじや

よだれ 永し

かんへいがはら切 ときおかるは そばに いたかつたで あるふ

さけニようてほうこ にんしかつても したが まハラぬ

せきが たんと だた

うじ川でさ、木 とかぢわらが 馬ニひきならべて どうくで わたつた

馬のあふた どうしゆかふ どうく

妙こくじの そでつのおなが公 のにわへいのふと いふた そうく やさか

いへかへした



「しんはん」一口はなし (第六)

元朝からはたらいて大晦日三金が たまつた いちねんじや
かさのあふらは なんじや 亥 (「し」の濁点は筆者蔵冊子本にはアリ)

水がにごつた いつすもふな 明ばん

初せつくよば れた酒かと おもふたら だんごの せつく

帳のかミがわるい 三わり引んか うだく いひな

日がミしかい あさねこそ おき なされ

八人してミこしを かいだおもたふて あちらへよつたり こちらへよつたり

かもしやさん ばんまでに しておくれ 惣わでき ません

盆のれいに さむらいのともは 仲元

八文のまつくは 四文三まけた 安うり

紺やニひいて いる三味線 何じやわからん あいの手

長吉くさいが たしなまんか へ

あの紺やハ染物 やらんのニ毎日廻る こんがよい

公家ハなへとりと さいたが 中納言ハ ゆき ひら

両丁のはかま すれとしよりへ とるハ けん たい

おしろいゑらふ ぬつたいやらしい 女じや べつたり

今井黍丸作

はんしんはな



〔しんはん〕 一口ばなし (第七)

今井黍丸作

ちいさい子が 火入ひつくり 返した はいかゝる

小供衆かして おくれんか つかひ

せんちへ ゆくのハ おかうか

夜番が借た かねにハ たいこ程な はんおす

番頭さんが這て 明がたにけられる しらんでい

金もちにひつくり 返つてもなれぬ筈チヤ 持金ル

こいノとよんだら ねていた犬ハ むくく

正月はくらがりに取 きて小べんかいが 明まして 御めでたふ

いせへ御かぐら上に いて半弓引たら 大々に あたつた

年よつてから親方 へもどりせハになる 番頭の白ねづミは かいごろし

二日酔でゑづい て居のを笑 ふ物じやナイ げろく

馬のけいこバで ふんしたハ 馬場

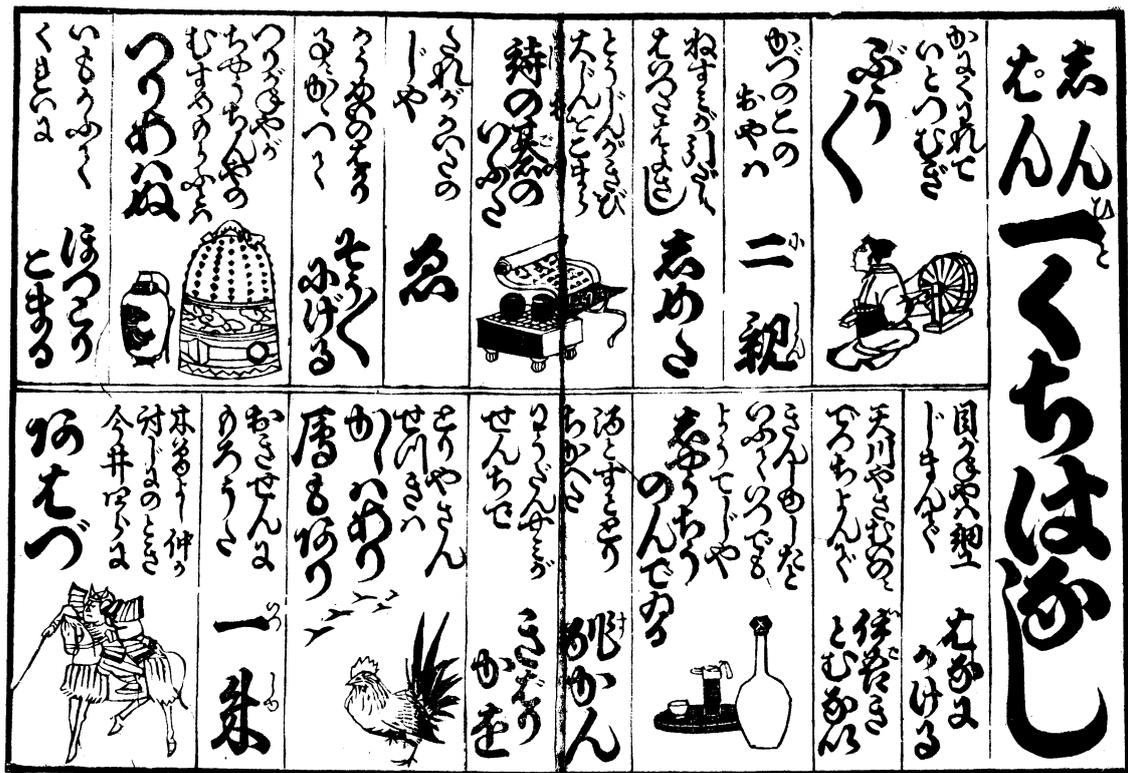
東口のみしやの軒ニ ちぎがつりてあるが めニかゝつた

狐が馬のくそ くハした気が ついてから鼻を つまむ

百性の気に 入たものにハ 田もやらふ あせもやらふ

蚊くすべする より親仁が 内ニいると ナラけぶたい

北ほり江市場 わた喜板



「しんぱん」一くちはなし (第八)

かにくわれて いとつむぎ ぶう く

かづのこの おやハ 二親

ねすみが引だしへ はいつたはよさし しめた

とうじんがきび 大じんをこまら そとおもふて 詩の暮の いふた

たれがかいたの じゃ ゑ

かうめいのはかり 事ニかゝつて そうく にげる

つりがねやが ちやうちんやの むすめもらふとハ つりあハぬ

いもかふて きれいに ほつこり こまる

目がねやハ細工 じまんではなに かける

天川やさむいのニ でつちよんで 伊吾き とむない

さんしゆしたと いふていつでも ようてじゃ しゃうちう のんである

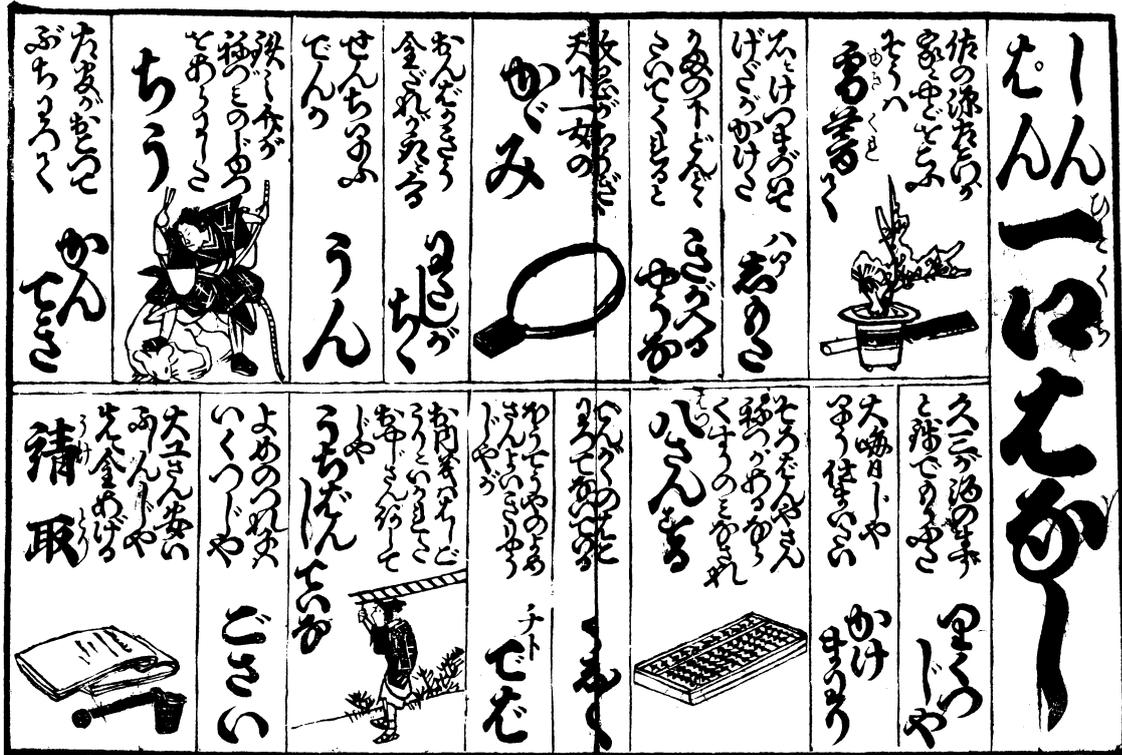
酒とすととり ちかへた 酔かん

わうだんやミが せんちで きばり かを

とりやさん せつきハ かしハあり 鳥もあり

おきせんに もろうた 一朱

木曾よし仲か 討じにのとき 今井四郎に あはつ



「しんぱん」一口はなし (第九)

佐の源左衛門が 家ニやどをこふ そうハ 雪暮て
 石ニけつまづいて げだがかけた ハア しもた
 かまの下どんど、たいてくれると きがへる やうな
 政岡がちうぎハ 天下一女の カジミ
 おんばかきう 金だれが取ニくる わたしが ち、
 せんち早ふ でんか うん
 鉄之介が ねづミのじゆつ をあらわした ちう
 左官がおこつて ぶちわつて かんてき
 久三が酒のまず と銭でもらふた りくつ じゃ
 大晦日じゃ 早う仕みたいい かけ まわり
 そろばんやさん ねつがあるなら くすりのミなされ 八さんする
 でんがくのはこ わつてないている くしく
 ほうてうやのよめ さんよいきりやう じゃが チト では
 お内義ハはしご うりニいかれた おやじさん何して じゃ うちばん していな
 よめのつれ子ハ いくつじや ごさい
 大工さん安い ふしんじや 先へ金あげる 請取

Introducing “Hitokuchibanashi”

KIKUCHI Shinichi

Abstract : This paper introduces ten kinds of “Hitokuchibanashi” (possessed by Kikuchi) that have not been introduced before.